

# 砂と海と太陽と

## —サハラでの挙式—

佐々木晃彦

(九州共立大学名誉教授)

### 前書き

1961年、日本の遠洋トロールがラス・パルマスを拠点に、初めてモーリタニア・イスラーム共和国(以下、モーリタニア)の領海内で操業を始めた(注1)。当時、この漁場で操業していたのはサハラの宗主国、スペイン漁船だけであった。欧州各国が本海域に集まり、サハラ沖は徐々に大国際漁場になった。日本船は紋甲イカとタコの漁場に集中しており、他国との競合はなかったが、サハラ沖と南アラビア以外に大型トロール船が活躍できる漁場は見つからなかった。そして、タコに至っては唯一、サハラ沖が漁場となった。

1960年11月28日、モーリタニア(当時の推定人口：120万人)が独立した。サハラ近海は陸棚面積が広く底魚の資源も豊富である。沖では数百隻の近代トロール船が操業しつつあった。独立間もない若い国にあって、小舟を使った小規模漁業を生業としてきた現地の人々には、大変な迷惑を掛けたことだろう。

1970年頃、日本は海外に食料資源を求めるようになる。市場拡大を望む日本と、入漁料収益や水産業に関わる教育を求めるアフリカ諸国の関係が強くなるうとしていた。他方、第3次国際海洋法会議を控え、各国の広範囲にわたる排他的管理権設定の動きが活発化していた。中南米、アジア、アフリカ諸国が主張する領海200カイリ論は、魚を主要蛋白源とする日本に大きな不安を与えていた。モーリタニアも1970年に、漁業専管水域12カイリ設定を宣言(注2)している。

1972年から1975年の混乱期、私は渉外担当として西アフリカ水産開発(以下、西ア水産)に入社、現地政府と西ア水産の合弁企業、モーリタニア水産(通称;MAFCO)に赴任した。MAFCOの仕事は、日常的な不法拿捕船の処理、日本人と現地人のトラブル解決や、船のワイヤーに挟まれ死亡した船員対応、船内でのナイフを使った殺人事件など多岐にわたった。日本人が現地人との間で傷害事件を起こした時は、裁判所周辺で数百人に囲まれた。年1~2度は、対政府折衝に出席の日本側代表団に同行した。

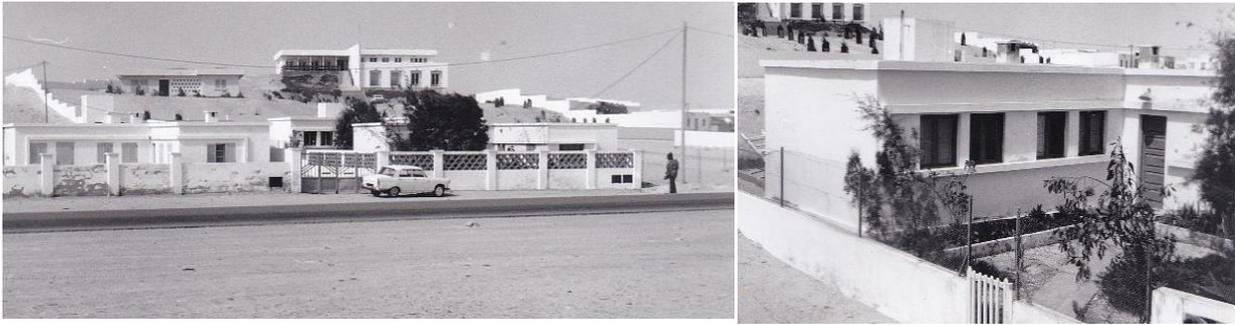
西ア水産は1970年に設立されている。国際協調事業の先鞭を担い、大洋漁業、日魯漁業、宝幸水産、極洋、大光、新生(以上、当時の社名表記)の出資に拠る合弁会社である。私事になるが、学生時代は演劇や映画に関心を持ち、卒業後の2年はフランスの大学で学んだ。帰国後は映画界に入ることが適わず、広告業界に身を置いていた(注3)。このような経歴から私を、一次産業と関わるには不向きと思った幹部がいた。サハラ赴任が頓挫しかけたそんな時、私を支えて下さったのが西ア水産社長の崎山守久(注4)。崎山は「フランス語さえできれば、あとは些細なこと」と笑い飛ばした。崎山がいなければ、サハラでの挙式はなかった。モーリタニアと日本に外交ルートがない時代、サハラの空港では現地法人初代社長の和田光太(注5)が、「よう来たてくれたなあ」と温かく迎えてくれた。

## I 現地人の結婚式

### I-1 祝宴前の車列

10台ばかりの車が猛然と走り去った。白い布切れがなびいていた。クラクションを鳴らし奇声も聞こえる。静かな砂漠の騒々しい様、何事だ?! 結婚式があることを知らせる車列であった。運転は無謀で、車が道路から踏み外すことも。「危ないなあ」と心配する私は、砂漠の生活を始めたばかり。仰天し、肝を潰すのも致し方ない。塩を含んだ硬い砂地(注6)は道路の延長になる。真剣に運転している風ではなかった。悪ふざけの雰囲気大だが、そんな車さばきが寧ろ、目出度い空気感を増していた。

海自管理局書記長のジブレルが、慌てるように車を飛ばし、我が家に来た。私の家は小高い丘に在るフランス領事館の真下に位置している。「今晚カエランで結婚式があるんだ」。カエランは現地人が居住する地域。何にでも興味を持つ私である。だって見聞だけでは身にならない、体験が大切なものだから。現地人の結婚式にも関心があった。同時に心配でもあった。当事者からお呼ばれしていない私が行き、折角の宴に水を差しはしまいか、カメラを持って行きたいが……。心配は尽きなかった。が、ジブレルは「僕がいるから大丈夫」と急かせた。彼は何時も私に親切な好青年(注7)で、とても心強かった。



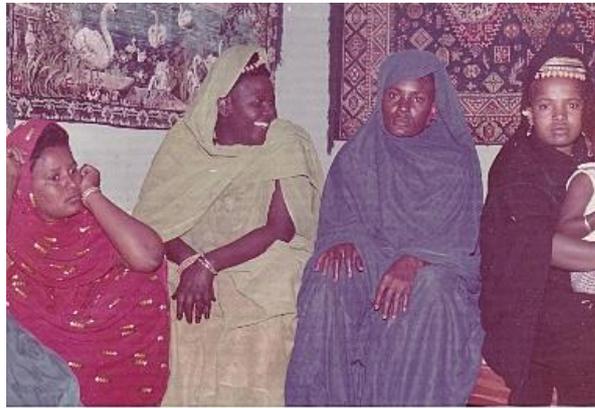
執拗な念押しを彼にするのには訳があった。写真撮影では苦い思い出がある。街の風景を撮って立ち去ろうとすると、乾物屋の叔父さんが追いかけてきた。同意を得てラクダの解体作業を撮影したのに、金を要求されたことも。前者の折りはモーリタニアで操業年数が最も古い会社、シジッペの会計担当者シバニー君に助けられた。後者の折りは、日系現地法人に勤める従業員が現場に偶然いて、私に加勢してくれたから難を免れた。好奇から外に向く心と“言動は最小に”と諫める心、この二つが同居していた。問題を起こさないよう、私は常々、細心の注意を払うよう努めていた。

## I - 2 10歳で嫁ぐ女性

「なぜグズグズしてるの。早く行かなきゃ踊りが終わってしまうよ」。ジブレルのブジョー404でカエランに向かった。陽が降りる夕方のサハラは、肌を撫でる風が殊のほか心地良い。カエランの道は迷路に近く、街灯もない。微かな太鼓の音が聞こえてくる。コンクリートを打った同じ形の家々が迫る。今夜は何時もと様子が違う。結婚式に向かう群れが、一定方向を目指していた。着飾った女性が目立つ。これは珍しいことだった。あとで分かったが、結婚式には女性の外出が認められていた。

狭い廊下を潜り抜け、辿り着いた中庭。それは国土全体を覆う砂漠土に過ぎない。だが、地球上では、この土の違いが多様な文化や暮らしの違いを生んできた。囲むように10世帯ばかりの家が軒を連ねる。太鼓のリズムに合わせ、タムタム踊りが始まっていた。ジブレルの許可を得て花嫁の控室に入ると、今夜の主演はヌアディブ自治港湾局に勤める知り合いの事務員ではないか。

落ち着かぬ様子が伺えた。「今夜はお前さんの結婚式かい?」。日頃の抜からぬ顔に笑みが広がった。外部との仕切りに下がっている扉代わりのゴザが激しく揺れる。何処の国・地域に行っても子供たちは元気だ。私たちがいる部屋に入ろうとしていた。出入口で見張りをする親戚の者が、ひどく子供を殴りつけた。この目出度い日に何と荒々しいこと。



控え室には花嫁と私の他に、中華人民共和国のモーリタニア大使館に5年勤め、帰国したばかりのアフメドゥ夫妻がいた。この国では女性が男性に声を掛けるのは珍しい。もっとも、夫人は諸外国を知る国際人、穏やかな雰囲気醸し出しながら積極的にお話しをしてきた。子供が一人「踊ろうよ」と私の手を引っ張った。こんな風に誘われるのも稀有なこと。花嫁の妹だった。踊りとヤギ肉の饗宴が夜を徹して続いた。

聞くと当地に於ける女性の適齢期は10歳であった。男が35歳で妻が10歳ということもあった。直ぐ子供を産み、その子供が10歳で結婚すれば、22～3歳でお祖母さんになることもあり得る。年少者の結婚と離婚、再婚、それに暫く前までは一夫多妻制が続いていた。似通った年齢の子供が14～5人いる家庭も珍しいことではない。宴の会場は、そんな人達で溢れ、收拾がつかない状態になっていた。

### I-3 現地の女兒と見合い

一人ブラリと散歩することがあった。Tシャツにラクダ革の草履ばきだが、これは出勤時も同じである。トタン張りのやや簡素な家から女が顔を出した。「寄って行かないか？」お茶のお誘いである。折角のお声掛けだが躊躇した。不測の事態が起きたら最悪だ。でも、ご厚意を無下にはできない。私は手招きする女に従った。家には暑さを凌ぎ、砂が入るのを防ぐために最小の窓しかない。だから真昼でも暗い。

独特の甘いお茶を戴いて数分、おもむろに、ある提案が出された。「実は家に娘がいるんだが、その子とお見合いをしないか？」。(そんな！余りに唐突！です)。でも、断ることは憚られた。女が本心で望んでいるのであれば、悲しい想いをさせたくない。いや、それとも独り者の私を、女は不憫に思っているのかも知れない。女は考えた末に、私を選んでいるかも(それはない、か)。

まあ、人が世に生まれること、そして誰かと会うことは奇跡に近い縁だ。提案を受け入れよう。女は私の来宅を知らせるために、隣の部屋にいる娘の所に行った。「今、ここ、を大切に」「振る舞いは失礼のないように」と肝に銘じた。ここでは諸事情に疎い20代半ばの独身外国人だ。ところが現れたのは、女性というより女兒であった。子

供、だ。10歳だと言う。女は「娘は生娘だ」(注8)と繰り返した。日本なら小学生。若し日本に帰国の際、入管に「妻です」と伝えたら、私は一体どうなる？犯罪者になるのではないか。

この地では所得に見合う一族郎党が親戚になるとも伝え聞く。すると、私の給与なら、直ぐ50人、100人、いや、500人くらいの集団で君臨することになる。一生サハラで暮らすのも良いか……。あり得る僅かな可能性も頭をよぎった。心はグラグラ揺れ、胸は潰れそうであった。3人で取り留めのないお喋りを始めて2~3分後、「では、これからは二人で話し合ってよ。私は席を外します」。そう私たちに伝えると、女は不意に姿を消した。寝耳に水とは、こんなことか。こうした展開は聞いていない。想像力に欠ける私を置き去りに、流れは深みに入って行く……。どうしよう。

弱った、2人だけ、になった。なってしまった。女兒は私を見据えている。フランス語で声を掛けた。反応が鈍い。簡単な質問にも返事がない。その雰囲気から、フランス語の単語、50も知っていないと思われた。3人での時は気付かなかったが、向こうはフランス語が分からない。こちらは現地の言葉が分からない。二人とも押し黙り、15分は過ぎた。神秘的で不思議な空気感に包まれた。女には感謝を示し、上手にNonの意思表示をしなければ。いや、違うでしょ！なぜ自己中心的に考えるのだ！こっちが断られるかも知れないのだ。冷や冷やししながら娘を前に困り果てていた。

女が入って来た。私に「決めたかい？」と尋ねた。真心を込め、精一杯の誠意を示してお断りした。そんな私がサハラ時代に、一時帰国の内地で婚姻届を提出し、現地に戻り、約半年の新婚生活を経て式を挙げた。順序が少しおかしいが、それは次節で述べさせて戴きたい。

## II サハラ砂漠での挙式に向けて

### II-1 阻まれた日本での挙式

2024年の11月で結婚50周年を迎える。1974年11月10日、私たちはモーリタニアのヌアディブで式を挙げた。式場は大西洋を見渡す丘に在るヌアディブ・カトリック教会。奇をてらったことでも、望んでいたことでもなかった。

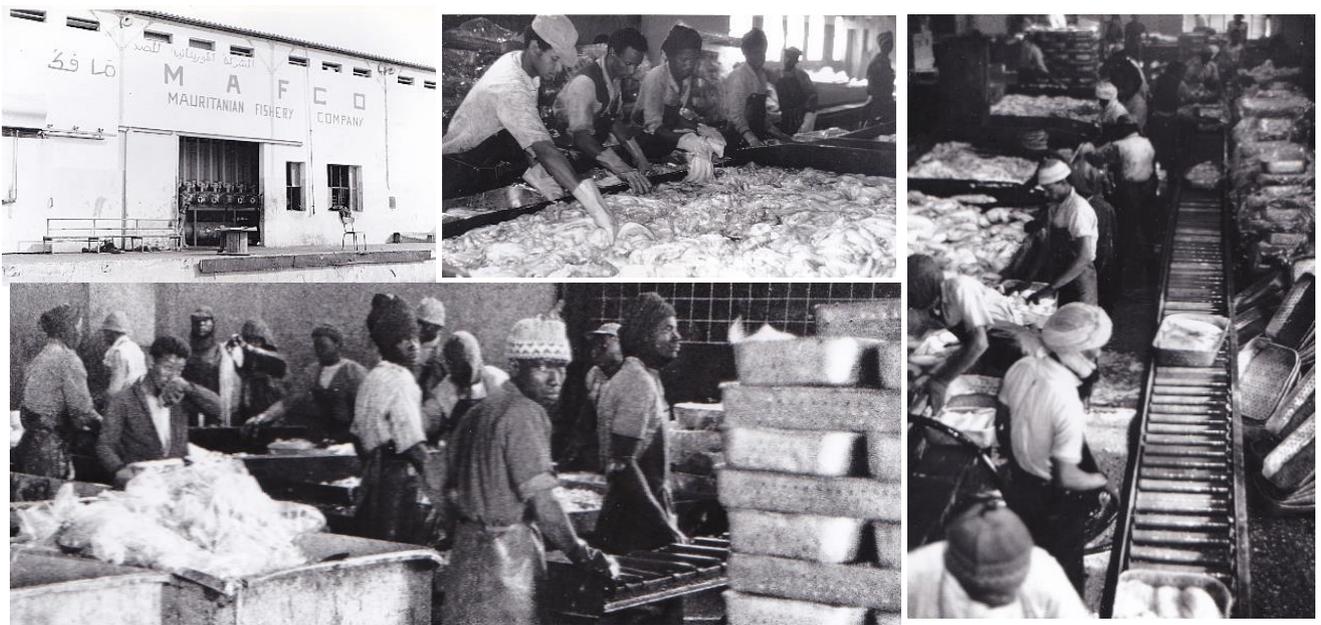
その顛末に触れる。1年半の現地勤務を終えた1974年5月、私は休暇で一時帰国を許された。雇用契約に拠れば1か月の休暇が与えられていた。1週間ほど自宅で過ごした後、磐梯朝日国立公園の裾野に在る温泉宿に赴いた。10数軒ある宿の中でも家族的だと知られた宿であった。学生時代まで遡ることになるが、この宿で長期滞在を数回していた。7年ぶりに訪ねたが、女将は私を覚えていた。

そして、滞在当時は中学生だった宿の娘と一緒にすることになった。モーリタニア

でのお見合い事件？に突き動かされた影響があったか。兎も角、当時、あの時代にあつては、家庭をつくる年齢に達していた。差し詰めチョコちゃんなら、眉毛を吊り上げ、顔を真っ赤にして「ポーッと生きてんじゃねーよ！」(注9)と叱り飛ばすであろうほど、当時の私は家庭を持つ意志など更々なく、ボンヤリしていた。

50年前の故郷は、四方が山に囲まれ、ただ田圃が広がる。そこそこの畑も。品川区と概ね同面積の地に170世帯が点在し、約570人が住む。その40%は高齢者だ。ほぼ自給自足の生活である。刺激は少ない。この種の祝い事が決まれば、親を始め親戚は盛大な披露宴を願う。宴には「待ってました！」とばかりに大人たちが集まる。酒を飲んで騒ぐことの好きな父は、長男である私の披露宴を楽しみにしていた。

しかし、東京本社には「仕事が山積だ。直ぐ戻れ」との電報が届いていた。一時帰国中の身であっても、日系企業の渉外部門の仕事、加えて総務、漁労、製造、工務の業務(注10)に携わる邦人の健康状態、その一部には妻帯者や赤ちゃんのいる家庭も。持病を持つ人・・・そんなことも忘れていなかった。「サハラでは砂の蓄熱性が低く、日中と夜から明け方にかけて寒暖の差が激しい。これに順応するのは難しい。この高低差が災いし、西アフリカ特有の下痢を伴う風邪をひく」(注11)。陸上で生活する邦人には、体調を崩し、診療所通いが続出したこともあった。



もちろん、MAFCO 船の船員 300 人に加え、大型トロール船で働く 2000 名の同邦人、彼らのご苦勞も心にあった。船の怪我は大きい。事故・事件があれば昼夜構わず自宅に連絡が入る。緊急入港する船の時間を予測し、岸壁で待ったことも度々あった。怪我人を車に乗せると診療所に向かう。私からの連絡を受け、待機しているフランス政府派遣の軍医が手術をする。怪我人の白い骨が見えている。でも、ここでの手術、麻酔をしません。週2回、給油が主目的の飛行機が降りる。ある日のこと、南アフリカ

から来たという日本人が私を見て「こんな所に日本人がいる！」と言ったことがある。“こんな所” そうか、私は“こんな所”にいる。確かに、ここには、怪我をしても、前は海、後ろは砂漠で移動手段がない。緊急用のヘリコプターは？“こんな所”にはありません。

さて、舞台は日本に戻る。町役場で入籍だけを済ませ、形ばかりの記念写真を撮った。そして私は一人、羽田を飛び立った。妻は2か月後の離日と決まった。しかし、現地に戻っても山積みの仕事はなく、むしろ閑散としていた。何時になく静かにすら感じた。そして分かったことは、私の不在中、「ムッシュー・ササキは現地に荷物を置いたまま、もう戻って来ないのでは？」との噂が実しやかに広まったのだという。

ムッシューはサハラに戻らず、そのまま日本に留まる？領海内の24時間操業に対応し、無線が入れば真夜中でも駆け付け、24時間体制で勤めていた(と当事者は思っている)。双方の家族が楽しみにしていた披露宴を断念させた、偽りのテレックス。何という乖離！誰かの指示で、誰かがMAFCOの氷蔵船からテレックスを打ったのだ。



## Ⅱ－2 支えてくれたサハラの友人

1974年7月4日、妻は日本人女性として、7人目の入国者になった。この2か月、妻とは手紙で連絡をし合った。ヌアディブの郵便局が開く時間は、飛行機発着時の前後に限った。合理的で無駄がない。到着時に合わせ郵便局に行くと必ず先客がいた。ヤギである。ヤギにとって飛行機の到着は食事時。30キロの重さに耐え得る麻袋からテーブルに手紙類が投げ出される。一斉にヤギが群がる。ヤギと押し合いになる。その力が尋常でない。死に物狂いだ。私が転びそうになる。まずは私書箱ごとに仕分けなければならないのに。重要書類や日本の家族から届いた私信もある筈だ。

しかし、ヤギも生きるのに必死。それも分かっている。風が吹けば書類は飛び散らる。あーあ、ヤギが食べている。この群には妻からの手紙を食べたヤギがいるかも知れぬ。でも、これでいいか。サハラの主役は動物だ。ラクダ、牛、ヤギ・・・全て放し飼いである。「動物との共生」は聞こえが良いが、矢張り、国全体が動物の園。私たちは間借りをしている立場である。小さな柵に閉じ込められ、狭い範囲、決まった

動線で生きているのが私たち人間であった。ヤギが紙を食べる。そのヤギを私たちが食べる(ゴメンナサイ、ゴメンナサイ)。これで善しとしよう。

神は、慌てず、焦らず、諦めずの3Aを金科玉条とする私に微笑む。私たちの事情を知った二人の神父さんは、教会で挙げることを勧めてくれた。

私は常々、神父さんを尊敬していた。教会に隣接する宿舎に出掛けてはレコードを掛け、ウィスキー・グラスを手に交友を深めていた。白い顎鬚が似合うフランス人の主席神父ケルロックさん、早8年も住んでおられるのに「もう4~5年滞在しなければ、この国を理解したとは言えないなあ」。さり気なく語って私を震え上がらせた。モーリシャス人の次席神父ロビヤールさんとは、三浦哲原著『忍ぶ川』の仏訳と一緒にする仲であったし、妻はフランス語を学んで瞬く間に上達した。



式日は決まった。しかし結婚指輪がない。物が無いことには慣れている。が、らしきものでも構わない、式当日の指輪は欲しい。会社のセネガル人冷凍技師、サンニャは洒落たネックレスをしている。滞在歴も10年と長い。彼なら適当なお店を知っているかも。中学生の頃、「信用できる友人に頼めば解決の糸口は見つかる。問題は一人で抱えないように」と母に諭されたことがあった。私は期待を込めてサンニャに尋ねた。

この国で働くセネガル人は多かった。私の知る木工職人もセネガル人であった。モーリタニアには、セネガル、マリ、ガンビア、ダホメ、ギニアなど近隣諸国から沢山の出稼ぎ人が来ていた。ところが、ネックレス、腕輪、ブローチ、指輪など銀製品を扱う銀細工師は現地のモロ族が担っていた。大雑把な表現になるが、外国人労働者は時間で管理された事務系・技術系(文明的領域)、モロ族は時間を超越したアート系(文化的領域)に棲み分けされている印象を受けた。

大通りに面して、宝石店の看板を掲げる店舗が数軒あった。サンニャと二人で、加工技術が優れ、商品値段も適当なお店を探し回った。彼らが所有する一番大掛かりな

道具は、土中に埋められた手動式吹子。傍らには製品に光沢を出す目的で使う、灰の入った湯が煮えたぎっている。あとはヤスリ 2～3 本が目についた。

この極めて簡単な道具で作ることを考えれば、製品の出来栄は相当レベルが高いと思う。彼らのアトリエを「余りにプリミチブ」と笑い蔑む人がいたら、即、笑いをお返ししたい。彼らが仕事に対峙した時の集中力、器用さ、忍耐力・・・(注 12)これには敬服、拍手喝采である。仙台市の工業高校を卒業後、私は東京・大田区馬込の町工場で油に塗れ、旋盤工をしていた。かような現場を経験しているからこそ分かり、感じるものが多少はある。銀細工師の置かれた環境を前に、彼らの力量に脱帽していた。脱帽して「彼らと“素の私”は、〈心の形〉が同じかも知れない」と勝手に思うことさえあった。



結局、サンニャのネックレスを作った店でオーダーすることに決めた。3メートル四方ほどのアトリエ兼売店では頭にターバンを巻いた細身の男が、せっせと直向きに制作に取り組んでいた。高級食材も調理を間違えばまずくなる。彼らの常食は、アワ、ヒエ、マカロニに魚か肉をまぶす。美味しそうに食べる。片手の指を上手に使い、丸めて口に放り込む。実に器用だ。食後の容器が転がっている。容器に残り物がへばりついている。これは何処の店でも見る光景であった。細身の男は「結婚指輪？簡単、簡単。このカタログから選んでくれ」と言いながら、自分は腕利きの職人であることを何度も口にした。プライドが高い。商品を一瞥すると結構高い値札が付いている。それなのに商売になるのは、出張者や旅行者が、銀細工をスヴニールとして買い求めてきたからであろう。

さて、注文はしたが、心配が残った。当地には時の概念が殆どない。今日が何日か、何曜日か、今は何時か・・・そのように時を刻む考えは無いに等しかった。悠々と流れる時を、敢えて刻み、小さな空間に自分を閉じ込めるなど彼らには論外であ

る。大体、店にはカレンダーがない。置時計もない。腕時計もしていない。およそ安物の時計なら、サハラの子細かな砂で直ぐ動かなくなるのが落ちだ。

「11月9日の17時までに作って欲しい」と伝えたが、果たして指輪は完成するのだろうか。発注したその日から、毎日、アトリエに通うことになった。

### II-3 青空床屋で髪を切る

私には行き付けの床屋があった。それはカエランに在るギニア人の店。粗末な扉にアラビア語とフランス語で併記してあるのは、どぎつい緑と黄色のペンキで書かれた「床屋」の殴り書き。「大人 60 ウギヤ(当時のレートで 360 円)、子ども 30 ウギヤ(同 180 円)」の張り紙が目に入った。2割も値上げしているではないか！前は、確か、大人が 50 ウギヤ(同 300 円)であった。彼は裁縫職人と一緒に店を構えていた。

室内を見渡すと、小さなテーブルの上に割れた鏡が立て掛けてある。道具は、ハサミ、櫛、そしてバリカンが其々一個ずつ、無造作に置いてある。190センチはある大男の仕事は真面目であった。ここでは笑い声が絶えなかった。お互いがオープンな態度で冗談を重ね合わせながら、ざっくばらんに語り合える喜びがあった。

風が爽やかな晴れ渡った日であった。サハラの空の青さは何処にも負けないと思う。麗らかな気分から、髪は外で切って貰うことにした。崩れ落ちそうで不安定な、座り心地の良くない椅子であった。使い古され、汚れ、変色した布が私の首に巻かれた。でも、座る椅子がある、首に巻く布切れがある、それだけで満足だった。嬉しかった。櫛、ハサミ、バリカンは、一度たりとも消毒した気配がなかった。布からは独特の香料が鼻をついた。ばい菌が怖い？それはいいの。いいの。大丈夫。ばい菌は私が怖くて逃げていく。心配する日本人に、そう応えた(注 13)。

帰り際、裁縫職人に話し掛けた。私は彼とも親しかった。店内にあった生地から2種類のお気に入りを選び、ズボンのオーダーメイドを依頼した。

### II-4 妻の髪は思いもよらぬ形に

式の前日、私は妻とカンサドーに出掛けた。ヌアディブから海岸線に沿って、10キロほどの場所にあった。カンサドーはフランス人の鉄鋼関係者 850 人が住む町で、学校、病院、スーパーマーケット、ケーキ屋、映画館、それにテニスコートやプールまであり、一つのコミュニティが形成されていた。美容師と理容師が一つの室内で働く、美容・理容院と呼ぶべき施設が一軒あった。

手前の床屋はスペイン人男性が、奥の美容院は中年のフランス人女性が経営していた。客一人が入れば手狭になるスペースである。美容師の彼女には16〜7歳の助手が一人ついてた。銀髪美容師が愛想の良い笑顔で迎えてくれた。顔馴染みでもあった彼女が「どれに致しましょうか」とモデル嬢の満載した分厚い本を2冊、私たちに渡した。

思ってもみなかったサハラでの挙式、髪だけはシッカリめかそうと決めていた。妻に似合いそうな髪型を選んだ。私は学生時代からスペイン語を学んでおり、現地でもスペイン人駐在員から教えを乞うていた。そんなこともあり、手持無沙汰な私は、体が空いていたスペイン人理容師とお喋りをしていた。また、店内の雑誌『エクスプレス』や『エル』に目を通していたので、妻の髪の進捗状況に無頓着であった。何より、美容師を信頼していた。そこに悲劇あった。

出来上がりは粗末であった。妻とモデルの違いは割り引くとしよう。割り引く、が、妻の髪は逆毛となって内側にふんだんに立てられ、頭は団子状態に膨らんでいた。「うわー！酷い！」そう思った私は怒りを堪えて美容師に相談した。しかし、美容師が手を掛けても、大勢に影響がないことは直ぐ分かった。私たちはガッカリしながら帰宅した。私は修理中の、港の網を思っていた。網目に風は滞留せず、何時も爽やかに通り抜けている。

一日2食にあり付け、眠る3畳間のスペースがあれば、あとは良いことも悪いことも全て付録。これはサハラの遊牧民から教わってきた。「怒りや悩みをため込まず、明るく行こう」と話し合った。妻は食事の準備に取り掛かった(注14)。

### Ⅲ 国際仕様の小さな挙式

私たちにはドレスとモーニングがなかった。砂が舞う砂漠地に背広は不要である。会社に行く時の服装は、Tシャツにコットンの作業ズボン、足元はビーチサンダル、そして暑さ対策に帽子を被っていた。結局、妻はスカイブルーに白い水玉模様が入ったワンピース、私は夏休暇にカナリア諸島のラス・パルマスで買った薄手のスーツにした。

教会を青空が包んでいる。入籍して半年が経っていた。純白のアルパを着た神父さんが





私たちの到着を待っていた。小さなプレーヤーからは、モーツアルトの“フルーツとオーケストラのためのコンチェルト”が流れている。式に出席したのは、神父さん御二人の他に、ダホメ人カメラマンのピエール、そして、ピエール一人では心配と彼の助手を買って出た航空会社 UTA の職員マギーであった。

サハラが舞台の、小さな手づくりの挙式。フランス人、モーリシャス人、ダホメ人、セネガル人、肝心の指輪はモーリタニア人、そう、私のスーツはスペインで買い、髪はギニア人に切ってもらった。50 年前のこの舞台、制作、演出、衣装、照明、音楽、振付などのスタッフは、さまざまな国の仲間、友人が担った国際仕様であった。さて、キャストは・・・全員が主役だ。太陽は万人に輝いている。悲観することは何もない。誠実であれば何事も可能なのだ。サハラで自分を鼓舞した。式後、私たちは、神父さんの宿舎に招かれた。ピエールとマギーも加わった歓談は夜更けまで続いた。神父さんは私たちに、式次第と詞がタイプ・アップされた小冊子を準備していた。4 人の自筆署名が入った小冊子は私たちの宝である。

ところで、1990 年代まで待たねばならないが、日本では、特殊法人日本芸術文化振興基金、社団法人企業メセナ協議会が創設され、社団法人経済団体連合会に社会貢献部が新設される。「物の豊かさと心の豊かさは分かち難く結びついている」ことの認識を共有する同人が、文化経済学会〈日本〉を設立する。文化への関心が高まりを見せる時代(注 15)である。そして、この領域の一端を担う(注 16)機会を戴くことになる私に、サハラの生活は大きな影響を与えていた(注 17)。

さて、本稿のテーマはサハラでの挙式。舞台を再々度、サハラに戻そう。式の翌日、私たちは 1 週間の休暇を貰い、セネガル共和国の首都ダカールに発った。入籍から半年、遅まきの新婚旅行であった。妻は、長女志乃を身籠っていた。

## おわりに

20 代後半の私は、公私とも遊牧民に助けて戴きました。親しい方々から自宅に招かれ

たことも数知れません。住まいはラクダの毛で編んだテントの時もありました。好きな場所に居を構え、一緒に満天の空を仰ぐ時間、それは心豊かな一時でした。

私の転居は「道楽の世界」「引越し貧乏」と言われてきました。ずいぶん前に受けた取材を思い出しています。「新しい土地への期待が半分、慣れた土地を離れる郷愁が半分入り混ぜで、荷造りを楽しむ一誰もが人生で2~3度は体験する引越し。しかし43年で31回の引越しをした人がいると聞いて国分寺の自宅を訪ねた」。以上は記者が書いた導入です。そして「サハラの水は美味しくて、心豊かな遊牧民の日常に触れて、『どうやら遊牧菌が住み着いたようです』という。32回目の引越しスケジュールは？ 一家は来年から、オレンジ色の電車が見える・・・」（『週刊住宅情報』「都会の遊牧民」1989年10月25日）。仕事は何時の時代も誰かに拾われ、また拾われ・・・転職7回です。偶然ですが、広告、水産、精密機器、生活産業、大学など、業界が変わりました。

その都度、新しいスタートにつき、目上の方や同僚の助言を得て一から学んできました。この生活形態は子供たちに影響を与えました。長女は13歳までに10回、長男は6年で6回転校しています。後日、「世界史を2回学んだけど、日本史は学習してない」と言われ、その時は「悪いことをしたなあ」と落ち込みました。アメリカ人カメラマンのブルース・オズボーンは「佐々木さんは、住居と仕事は次々変わるが、奥さんは変わらないね」と不思議そうでした。

流れに任せる習性は趣味の領域でも。お笑い台本を書いていたが、漫談家のローカル岡師匠から「一緒に舞台に上がろう」と勧められました。そして、私の書いた《漫才文化経済学》を使い「ボーイズ・バラエティー大会特別興行」（新宿末広亭、1999年7月31日）で漫才師デビューを果たしました。「笑いを取るのと笑われ者になるのは違うぞ」と、その稽古は厳しいものでした。天才寄席芸人として尊敬していましたが、2006年1月、肝硬変で亡くなりました。享年62歳でした。師匠の死去に伴い、ビッグバンドでトロンボーン奏者に転向。グレンミラーを中心に350曲の楽譜は今も手元にあります。

現在は市川一先生ご指導のもと川柳創作に取り組んでいます。市川一編『川柳ダイジェスト』に毎月6句掲載して7年。今まで約500句詠みました。一部作品は、音楽家、八木倫明氏とのメール通信、「楽夢」編集長、若菜はるお氏制作の通信紙に掲載して戴いております。双方の媒体に拠る外部発信は、年2~3回ペースで6年続いております。

サハラで結婚して50年経ちますが、習性は容易に変わりません。まず、水の使い方。強く蛇口から出すことができません。稀にド〜ッ！と零れるほどの水を出しているのを見ますが、私は必要と思われる最少量しか使えないのです。プリミチブな生活空間が好きで電子機器類は大の苦手。携帯電話を持ったことがありません。

拙い文章をご掲載頂いた財団法人昭和経済研究所アラブ調査室に感謝申し上げます。  
特に、執筆のお声かけを下されたアラブ調査室長の塩尻和子先生には、諸々のご指導を戴きました。半世紀にわたり段ボール箱に詰めたままの、サハラ時代の資料、名刺、写真・・・これらに触れる機会となりました。そして、砂と海と太陽に包まれた、サハラの青春時代が蘇っております。有難うございました。

## 註

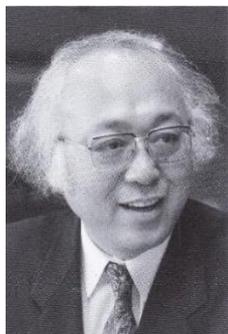
- (1) ラス・パルマスはサハラ砂漠西方の余り遠くない大西洋上に浮かぶ、スペイン領カナリア群島の一つ、グランカナリア島の首邑。群島は7つの島で構成され、緯度は沖縄とほぼ同じ。気温は年中、20度から25度程度で住み心地の良い美しい島である。港のゲートを出た丘陵の通称『山手線』には飲み屋が並び、女たちが怪しげな日本語で嬌声をあげていた。漁場と船の仕様、遠洋トロール事業の歴史を含め、和田光太『海・船・魚 思いつくままに1』（私家版）PP179～201に詳述
- (2) モーリタニアが漁業専管水域を12カイリに設定する2年前の1968年、日本は西ア水産会長に就任する初代水産庁長官の岡井正男を団長に、アフリカ訪問親善使節団を結成し、モーリタニアに入国。モクタール・ウルド・ダダ大統領に岡井は①日本人村をつくり共存共栄を図る、②産業活性化を進める、③教育普及への協力、以上3点を強調し、西ア水産設立の背景を伝えた。1970年前後、日本が海外漁場で獲得する全体量の約20%はモーリタニア領海内であった。西ア水産設立に出資した企業が所有する24隻の大型トロール船、冷凍加工設備を持つ母工船、船員の3者が24時間操業を行い、大型運搬船が日本へのピストン輸送に当たっていた。MAFCOの設立目的は大きく、日本側には大型トロール船による水揚げ権利の保持、現地政府側には入漁料取得と現地人の漁法習得にあった。大型トロール船の日本人2000名、現地人300名。参照：脚注(10)
- (3) 広告業界入りを強く勧めた魚住勉(1947～)は、伊勢丹、サントリー、キリンビール、丸井、小学館、パルコなどのCM、ポスターのコピーを担当。有名なキャッチコピーに「アイラブユー」「ひとりよりふたり」。作詞も手掛け代表作に「男と女のラブゲーム」「アンパンマン体操」。妻は女優の浅野温子。筆者は、伊勢丹、伊藤園、大鵬薬品、住友林業のコピーを担当
- (4) 崎山守久(1908～1998)西ア水産設立時は日魯漁業専務取締役。水産業界各社の重役を前に、一言で空気感を変え凌駕する迫力に、当時20代半ばの私は圧倒された。崎山の最終職位は日魯漁業副社長
- (5) 和田光太(1915～1990)1960年以降は遠洋トロール事業に従事。1970年、日魯漁業から西ア水産に出向。同社常務としてモーリタニアに勤務、モーリタニア水産株式会社(MAFCO)設立に伴い同社初代社長を兼任。1972年に同社長を退任し帰国後、日魯漁業取締役、常務取締役。以上から、1970年にはサハラ砂漠に日本人コミュニティが出来ていた。1972年に社長は、和田から広田英雄に。週末は保養地、正月は独身寮に、日本人家族が集まり懇親を図った。参照：Ⅱ-1写真。なお、各種底曳漁業に関わる漁具、漁法、漁船は、和田著『実用トロール漁法』（成山堂）が詳し

- い。他著に『水産資源と漁獲力』（水産社）など
- (6) 肥沃度ランク G の砂漠土は 1 年のうち 9 か月以上、土が乾くような乾燥地の土。地表面に塩類が集積しやすく植物が吸水できずに枯れる(塩害)。世界では年間およそ 600 万ヘクタールの割合で砂漠化が進行しており、水分も養分も蓄える力のない土が増えている。藤井一至「世界の土を探る」(東京新聞、2024 年 4 月 14 日)
  - (7) アラブ人の公の行動には、礼儀作法が深く沁み込んでいる。社会的礼儀は何百年の風習に根ざし、個人の身についた習慣になっている。礼儀正しさは主として、宗教から吹き込まれたものである。神の名に拠る礼儀作法の決まりは、明示されたもの、暗示的なものを含め、無数にある。アラブ人は暖かい歓迎を喜ぶ。ゲストの孤独感を労わるように、あらゆる心遣いが与えられなければならない。サニア・ハマディ、笠原佳雄訳『アラブ人の気質と性格』(サイマル出版会)PP60～68 に詳述
  - (8) イスラーム世界では若い女性の結婚を巡る悲劇が、決して少なくない。純潔を疑われた娘が、男性親族の手によって断罪されることは良く語られることである。これは「名誉のための殺人」と呼ばれる。女性はあくまでも後見人たる父系血族の家の所有物なのである。しかし、実際には法的判断は現実社会からの断罪よりも遥かに穏やかであり、姦通罪ができるだけ成立しないようにするための手厚い配慮がみられる。妻が姦通罪で訴えられる場合も出来る限り成立させぬよう細則がみられる。以上、塩尻和子『イスラームの人間観・世界観—宗教思想の深淵へ—』(筑波大学出版会)「イスラーム法にみる女性像」からの抜粋。第 1 章「イスラームの人間観と自然観」第 4 項「イスラーム的フェミニズムの地平」PP34～48 に詳述
  - (9) 「チョコちゃんに叱られる」は、2018 年 4 月 18 日から NHK 総合 TV で放送の、素朴かつ当たり前すぎる疑問を投げかける、クイズ形式バラエティ番組。チョコちゃんは「好奇心が旺盛で何でも知っている 5 歳の女の子」という設定。回答者が答えに詰まると CG によって突然真っ赤になり、巨大化した決め台詞と共に叱り、そして答えを明かす
  - (10) モーリタニア政府は領海内操業をする外国企業に、漁獲物の陸揚げと冷蔵庫の稼働を義務付けた。MAFCO は冷凍設備のない 100 トン前後の氷蔵船 22 隻で、1 週間をサイクルに操業と入港を繰り返した。会社は、現地人教育と産業育成に重点を置いており、特に大型トロール船の操業に悪影響を与えぬよう、邦人スタッフには現地(人)への理解が強く求められた。当時、MAFCO の日本人陸上スタッフは、社長以下、庶務・会計の総務部 2 名、漁船運航・現地人教育の漁労部 5 名、選別作業・冷凍加工・出荷作業の製造部 7 名、治工具製造・漁船修理の工務部 3 名、渉外部 2 名の合計 20 名。現地人は約 300 名。海上スタッフは、日本人船員約 300 名、現地人船員約 700 名。当時の MAFCO は、陸海合計で約 1320 名体制であった。現地政府が得たのは、入漁料、製造工程の技術、冷蔵庫の稼働、冷凍加工品の対日本輸出に伴う外貨など。参照：脚注(2)
  - (11) 人間の原点を見る—モーリタニア回教共和国のメマントー佐々木俊子(米沢新聞、1975 年 2 月 1 日)
  - (12) 深刻な人生観—彼らにとって人生とは果てしない、死にものぐるいの努力なのである。例えば砂漠の生活はあらゆる面で飢とぎりぎりの決意を必要とする。つまり砂漠における第一の掟は忍耐と禁欲である。忍耐は苦しみと悲惨に打ち勝つための、人生で最も強い武器と考えられている。

- 忍耐さえあれば、全てが癒される。忍耐がなければ何も治らない。忍耐と思慮分別は重要な行動規範になり、自制心も同様に重視される。前掲サニア・ハマディ、PP165～169に詳述
- (13) アフリカ・サハラ(アラビア語で荒れ果てた大地の意味)砂漠最西端のモーリタニア回教共和国の町、ヌアディブ。ここで青春時代の4年間を過ごし、結婚式を挙げ、長女をもうけた現セゾン美術館勤務の佐々木晃彦さん。「山形県の豪雪地帯で育ったので、私にとってヌアディブは雪が砂に代わっただけ」という。「サハラには、まだ人間の踏み入れていない自然の美しさがあります。銀色の砂のさざ波が細かく煌めく自然美の結晶は、私を勇気づけてくれました」と随所にサハラ賛歌が。人・人・人模様—サハラが一家の原点— (毎日新聞夕刊、1991年8月27日)
- (14) この国の唯一の僅かな農耕地が、セネガル川流域の堤防下に在った。中華人民共和国政府の技術協力隊の手に拠る。しかし、この耕作地も数年来の大干ばつでセネガル川が逆流、海水の塩分で稲作不可能になっていた。一般国民は全世界からの援助を待った。従ってヌアディブでの食糧は、主にスペイン、モロッコ、フランスからの輸入に頼った。ところが、食料品店は2軒のみ。それも1か月2回の入港・入荷しかない。ラス・パルマスから入る木造運搬船に故障があれば、スペイン、モロッコ、フランスなどが原産地の食糧は一切入荷されない。現にここ1か月は野菜他の生鮮食品が荷揚げされていない。こうなると、海から揚がったばかりのイカ、タコ他の魚を使い、食卓を和食中心に整える。毎日、大盛の刺身だけが並ぶ。前掲米沢新聞
- (15) 以下『社会教育』の目次を記す。遠山敦子「アートマネジメントへの期待」、池上惇「文化経済学とは何か—文化と経済の融合を考える—」、田中仙堂「日本型アートマネジメントに向けて」、伊藤裕夫「アートマネジメントの基本的考え方—メセナとの関連から考察—」、佐々木晃彦「いまなぜ芸術経営学か—芸術経営学を学ぶ学生の視点と反応—」、守屋秀夫「施設づくりからみたアートマネジメント文化施設の現状と未来—」、永尾丈二「水(行政)と油(芸術・文化)が溶け合うために」、山田みきひろ「実践者からみたアートマネジメント—演劇—」、樽松三郎「同一音楽—」、文化庁文化部地域文化振興課「文化活動を支援する行政施策」、小林卓「財団法人富士市文化振興財団に於ける試行錯誤の自主事業」以上、特集；文化事業とアートマネジメント『社会教育』(財団法人全日本社会教育連合会、1995年6月)PP4～41
- (16) 1991年から25年の間に、「文化経済学」「芸術経営学」の講義で、久留米大学、九州産業大学、九州女子大学、静岡文化芸術大学、亜細亜大学、跡見学園女子大学、新潟産業大学に非常勤出講、海外では、台北芸術大学大学院、HEC モントリオール(モントリオール高等商科大学院大学)、レンヌ第一大学大学院、明智大学大学院の招聘で出講する機会を得た
- (17) サハラ砂漠と芸術経営学。何の関係があるのか。およそ想像もつかないが、青春の日のサハラ体験が芸術経営学という新しい学問を築く基礎になったと書いている(「世界思想」25号)。時計を持つ者は少ない。みんな、ゆったりと生きている。しかし、砂漠には何か豊かさがある。モノは乏しいが、砂山の厚みは“時の蓄積”を教えてくれる。「失われゆく一瞬一瞬が積もらせる砂山を見ていると、時間はなるほど過ぎ去るけれども、決して消えるのではない・・・何処か深部に豊かに蓄えられてゆく」。美術館の運営やコンサートの企画、演劇などの芸術活動は、砂山のように長い蓄積の中から光を放つ。芸術経営はラクダを率いるキャラバンに似ている。砂嵐に遭うこともあり、強力なリーダーシップが求められるという。芸術というサービスは普通の商品と違う。

遊牧民が自分の感覚だけを頼りにオアシスを求めながら生きるように、芸術活動も内からこみあげてくるものに突き動かされて事を運ぶ。合理性とは違う熱い志といった資質がものをいう。モノが溢れ余暇が増え、音楽を聴き、絵画を見る。モノではなく何かをスル時代になった。文化施設もできた。それをどう生かすか。芸術経営が重要になる。単なる損益計算の数字ではない新しい経営学だ。西日本新聞「春秋」（西日本新聞社、1998年6月2日）

## プロフィール



佐々木晃彦(ささき・あきひこ)山形県川西町生まれ

### 【主な職歴】

1972～1975年 西アフリカ水産開発(株)、その間、現地法人モーリタニア水産(株)出向  
1976～1988年 ミノルタカメラ(株)、1979～85年 現地法人ミノルタフランス出向  
1988～1991年 セゾンG、日ソ文化ビジネス構築、第6回日ソ円卓会議(モスクワ)出席  
1991～2011年 九州共立大学経済学部経営学科教授  
2011年4月～ 九州共立大学名誉教授

### 【専門分野】

文化経済学、芸術経営学、文化産業論、企業文化論

### 【主な社会活動歴】

社団法人企業メセナ協議会幹事、財団法人新星日本交響楽団評議員、財団法人東京フィルハーモニー交響楽団評議員、独立行政法人日本芸術文化振興基金地域文化専門委員会委員、財団法人芳賀教育文化振興財団ボランティア顕彰委員会委員、財団法人福岡県市町村研究所専門アドバイザー、北九州市文化振興基金奨励事業審査委員、北九州演劇祭顧問、春日市文化審議会会長、芦屋町外二ヶ所競艇施行組合検討委員会委員長、財団法人富士市文化振興財団芸術委員、文化経済学会<日本>理事、同学会九州部会長

### 【主な著書】

単著『南仏プロヴァンス物語』（丸善）、『異文化経営学』（東海大学出版会）、『文化経済学への招待』（芙蓉書房出版）、『文化産業論』（北樹出版）、『豊かさの社会学』（丸善）  
編著『企業文化とは何か』（北樹出版）、『芸術経営学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『文明と文化の視角』（東海大学出版会）、『アートマネジメントの会計—理論と実務—』（中央経済社）  
共著『文化経済学を学ぶ人のために』分担執筆：「メセナの時代」（世界思想社）  
『東アジアの現状と課題』分担執筆：「文化経済学の展望」（九州大学出版会）  
監修 芸術経営学講座シリーズ全4巻『美術編』『音楽編』『演劇編』『映像編』（東海大学出版会）  
文化経済学シリーズ全10巻『公営競技の文化経済学』『観光の文化経済学』他(芙蓉書房出版)